論　説

南米における沖縄移民の特質

石　川　朋　子

Ⅰ．はじめに
Ⅱ．沖縄移民と世界のウチナーンチュ大会
　1 移民の形態
　2 世界のウチナーンチュ大会
　3 世界のウチナーンチュ大会の源泉―沖縄県系移民の現在
Ⅲ．ブラジル移民・ボリビア移民の特徴
　1 ブラジル移民の職業（労働）の変遷
　2 ボリビア移民の土地所有権の集積過程
Ⅳ．ブラジル移民・ボリビア移民と共同体
　1 判断枠組
　2 恩納村とブラジル移民・ボリビア移民との絆
　3 共同体の存続―シマンチュの絆
　4 共同体の生活基盤としてのイノー―コモンズの海
Ⅴ．おわりに―今後の課題

Ⅰ．はじめに

沖縄出身移民（以下、沖縄移民とする）の研究は、これまで海外雄飛、出稼ぎ、および国策等で論じられ多くの研究成果があるが、本稿は筆者が担当した『恩納村誌』移民分野の海外調査・報告（以下、本件調査・報告とする）[1]を契機に、沖縄移民の特質とは何かについて考察し、「共同体の存続―シマンチュの絆」が特質のひとつであると結論づけた。共同体は、他者との関係で、沖縄（琉球）、市町村（間切）、字（シマ）という単位で現出し、広狭の両面を持っている。移民にとっての共同体という概念は、文脈のなかで捉えていく必要がある。共同体は生活基盤の側面と精神世界の側面から成り立っているが、移民にとっての共同体は精神世界の側面が存続している[2]。精神世界は、生活基盤によって支えられる。その生活基盤は、農業、イノー、入会林野等であり、移民の精神世界の重要な位置を占めているのがイノーであると考えられる。

そして、移民にとっての精神世界は人との絆（シマンシュの絆）によって確認される。海外にでたウチナーンチュ（沖縄移民）にとって世界のウチナーンチュ大会は、沖縄移民と母村との関係性において、共同体（シマンチュ）の精神世界の側面があり、共同体存続の機能をもっている。この観点から本稿では沖縄移民の特質の現象として、世界のウチナーンチュ大会を取り上げる。さらに本件調査・報告を基に、ブラジル移民・ボリビア移民と母村との関わりからシマンチュの絆について述べ、それは共同体存続の機能であると結論づける。特に沿海村落である恩納村出身の南米移民は、共同体の生活基盤としてのイノー、いわゆる「コモンズの海[3]」の経験・記憶があり、その経験・記憶に基づいた人間の豊かさとチムグクルが、恩納村出身の南米移民の特徴のひとつであるという結論にいたった。

本稿では、沖縄移民の特質を共同体の存続に求めるものである。Ⅱでは沖縄移民と世界のウチナーンチュ大会を取り上げ、つぎにⅢではブラジル移民・ボリビア移民の特徴について述べ、Ⅳではブラジル移民・ボリビア移民と共同体について考察し、Ⅴおわりには、今後の課題について述べる。

Ⅱ．沖縄移民と世界のウチナーンチュ大会

１．移民の形態

移民の定義・形態については諸説あるが、本稿では目的別に出稼ぎ的移民と定住的移民に分類し、さらに定住的移民を契約移民、自由移民、計画移民に便宜上分類する。

(1) 出稼ぎ的移民／定住的移民

渡航目的から「出稼ぎ的移民」を、故郷を離れ、他郷に出向いて働き、帰郷した、または帰郷することを前提にした移民とする。一方、帰郷することを前提とせず、渡航先で定住することを目的にした移民を「定住的移民」と分類する。そうすると南米移民の大半は、出稼ぎ的移民ではなく、沖縄での財産を処分して他郷に定住するという前提で渡航したことが、本件調査・報告で明確になった。つまり財産を処分し、家族で渡航、または単身で渡航した場合でも、家族や親戚を呼び寄せたり、家族が息子を頼っ

て渡航したりしている[4]。

本件調査・報告で、ほとんどのインフォーマントが渡航する際に故郷に戻らないという覚悟をした、出稼ぎ感覚では決して渡航しなかった、と証言している[5]。筆者は、戦前の南洋移民の調査・研究をおこなっているが、聴き取り調査では、南洋（現在のミクロネシア）と沖縄との往来はあったという証言が多い。もちろん、南洋と南米では、沖縄からの距離も、移民先の環境も大きく異なる。ブラジルとボリビアの場合は、大陸で、内陸であるが、南洋の場合は海に囲まれ、気候も沖縄に似ている。また、南洋は第一次世界大戦後、国際連盟委任統治領で日本が統治していたので、旅券は不要で、沖縄と南洋への行き来は南米に比べると容易だった。

以上のことから、筆者自身のこれまでの南洋移民の調査・研究[6]と本件調査・報告より南米移民は定住的移民と位置づける。

(2) 契約移民／自由移民／計画移民

定住的移民を契約移民、自由契移民、計画移民に分類する。ここでいう契約移民というのは、労働契約の期間を終え、帰郷するということではなく、沖縄から渡航する際に渡航先での受け入れが明確で、渡航後も契約先で労働し、賃金を得て、契約期間終了時に次の働き先に移っていった移民とする。自由移民とは、沖縄からの渡航時に引受人は存在するが、それは書類上の引受人で、渡航後に働き先をみつけることになった場合の移民、または呼び寄せ移民を便宜上「自由移民」と呼ぶことにする。

計画移民とは、ボリビア移民に代表されるように、土地が入手できるという条件で渡航した移民とする。ブラジルのカッペン移民も土地が入手できるということで渡航したので、計画移民として位置づける。

移民の分類･定義については、移民研究者によって異なるが、本稿では、以上のように分類しておく。

２．世界のウチナーンチュ大会

沖縄移民の特質は、現在の「世界のウチナーンチュ大会」に端的に現れ

ているといえる。世界のウチナーンチュ大会は、1990年に第1回が開催され、約5年に1回開催されている。沖縄移民の特徴と他府県出身移民との大きな違いは、移民した後も、海外に出ても、シマンチュとして繋がっているということが大きな特徴といえる。つまり、出ていったから関係が終わるということではなく、離れていてもシマンチュとしての絆があるということである。先述した移民の形態からすると、南米移民は定住的移民であり、帰国するという前提はなかった。しかし、沖縄県で世界のウチナーンチュ大会が開催されることになったことで、帰国し、家族や親戚、シマンチュとして絆を深める機会を得ることになる。

筆者が、1990年代に初めてボリビアに行った時、第1次移民のA氏が「自分達は棄民である。棄てられた民である」と言っていたが、果たして彼らは棄民なのか、疑問であった。例えば筆者の母とボリビアへ渡った伯母との関係をみていると決して棄民ではなく、離れていても姉妹の絆があり、シマンチュとの絆があると感じていたからである。今回もA氏から聴き取り調査を行ったが、「棄民」ということは一度も言わなかった。「棄民」という側面がなかったとは言えないが、海外移民と沖縄との関係が、棄てた、棄てられたという関係にあるのか、というと、そのような関係ではなかったと考えられる。沖縄移民の特質は、海外に出ていっても関わりや繋がりがあり、繋がっている、絆が存在している。それが沖縄移民の特質だといえるのではないか。

世界のウチナーンチュ大会は、海外に渡航したウチナーンチュとの潜在的絆意識を、県主導で顕在化した結果であろう。世界のウチナーンチュ大会開催時の県知事は、西銘順治[7]であった。西銘は、父の仕事の関係で小学校を与那国、石垣、パラオへと転校している。パラオへは、1932年9月にパラオ尋常高等小学校へ転入し、在学中は首席を通し卒業式には総代に選ばれている。パラオの学校でのことを西銘は「石垣からいきなり南洋パラオに行って、植民地教育の中に放り込まれた。周囲はみんな南洋庁の官僚、高官、事業家など民間の金持ちの子弟間に挟まって、大変窮屈な思いをした」と振り返り、いじめられ、ウチナーンチュ蔑視の傾向があった

と振り返っている[8]。さらに「僕のような生き方は歴史的所産」と言い、「パラオの学校や県外からの役人や商人の子弟と一緒に勉強したが、そこで感じたのは言葉からくる劣等感。水戸の高等学校でも沖縄出身ということでいろんな経験をした。しかし、郷里の歴史を勉強するようになってからだ、ヤマトと違うからといってひがむことはないと思ったのは。本を読み歴史を勉強し、沖縄の伝統的舞踊や演劇を通じて感じるのは、沖縄とヤマトは同質であっても全く同じものではない、ということだ」[9]と背景説明をしている。

また、琉球新報の新春対談では「いくらヤマトンチュになろうと思ってもなり切れないというウチナーンチュとしての特色があるんじゃないですか。それが一番大事じゃないですか」「ぼくはこれが一番大事なことだとだと思うんですよ。ヤマトゥの文化に迎合することないですよ」[10]と語っている。西銘は、南洋や本土での生活のなかで、自文化を相対化させ、「誇り」へと転化させていったのであろう。そのことは、西銘の「国際交流拠点形成構想」(1979 年)、「県立芸術大学の創設」(1986 年)、「世界のウチナーンチュ大会」（1990 年）、「首里城正殿の再建」（1992 年）等の政策にも現れている。つまり、県知事である西銘自身が、県外・海外で生活した経験があり、沖縄移民の潜在意識を当事者として知っていた。西銘県政は、海外のウチナーンチュの潜在意識としての絆を国際交流拠点、観光立県という形で連携させた政策として世界のウチナーンチュ大会を位置づけていたのではないかと、考えられる。そのことは、沖縄アイデンティティの確立、沖縄共同体の存続（シマンチュの絆）の機能を果たしたといえる。

また西銘は、1983 年にアルゼンチンのブエノスアイレス州から農業移民百家族受け入れの申し出を受け、沖縄県として準備を進めていた。結局、アルゼンチンの政情不安を理由に断念したが、この移住計画について、西銘は意欲的で、「資金と技術を持ち込み新天地で活躍の場を広げると同時に、新しい人を送って母県との交流を深めようとしていた」[11]という。

さらに西銘は、1984 年 11 月 14 日に基地問題で訪米する考えを表明し、翌年 6 月 7 日にはワインバーガー長官と会談し、直談判している。長官と

の会談は日本大使館を通して調整が行われていたが、外務省は否定的で、調整は難航していた。その会談が実現したのは、ハワイ沖縄県人会の尽力によるものであった[12]。

ワシントンで米国政府高官に基地整理縮小を訴えた後、西銘は6月10日アトランタに向かった。訪米のもう一つの目的は、県出身者を激励するためでもあった。ワシントン入り前の6月1日には、北米移住95周年記念式典に参加し、県出身者の活躍をたたえて激励している。6月11日にはアトランタで県出身者が集まり、県出身の自宅で懇親会が開かれた。知事の訪問にみんな感激して、アトランタでも県人会をつくって励まし合おうということになったという。西銘を歓迎するため、ゴーヤーチャンプル、揚げ豆腐等の沖縄料理を持ち寄って、民謡を歌い、カチャーシーを踊るなど手作りの夕食会を開いた。それに西銘は感激し、アトランタからハワイへ向かう機上、同行していた知事公室基地渉外課屋富祖隆副参事（当時）に「あんなに喜んでもらえるなら毎年行きたいが、そうもいかない。アメリカ中から県人を招待して沖縄でパーティーを開いたらどうだろう」と提案した[13]。

6月14日にはハワイ州の姉妹提携調印式、16日にはハワイ移民百年祭に出席した。式典終了後、西銘は県人会幹部と会食し、ロサンゼルス、アトランタでの県人の印象を話し、「ウチナーンチュはみなチバトーンドー（頑張っている）。一度全員集合したいな」と提案した。その提案に対して出席者は喜んで賛成した[14]。その5年後、1990年8月に「世界のウチナーンチュ大会」が開催される。各国から2400人の海外移住者が参加し、多くの出会いと交流が行われ、海外の県出身者ネットワークづくりのきっかけになる。このネットワークは、シマンチュと移民の絆、さらに海外の移民同士の絆を強くすることになる。それはウチナーンチュの精神的絆である。同時に共同体存続の機能も果たすことになる。

では、これまでの世界ウチナーンチュ大会のキャッチフレーズ、海外参加者数、イベント参加者数[15]についてみていく。

第1回大会（1990年）のキャッチフレーズは「世界のウチナーンチュ

がやってきた」で、海外参加者が約 2400 人でイベント参加者が約 47 万人、第 2 回大会（1995 年）の海外参加者は約 3400 人、イベント参加は約 52 万人であった。キャッチフレーズは「海を越え、言葉を超えて」、これは 2 世、3 世がウチナーグチ、日本語を話せない子供たちがでてきたということが想定できる。第 3 回大会（2001 年）はキャッチフレーズが「未来―ちゅら夢　心にのせて」、海外参加者が約 4000 人でイベント入場者が約 266,047 人、第 4 回大会（2006 年）のキャッチフレーズは「ひろがるチムグクル　つなげるチムチュラサ」で、海外参加者は約 44,000 人でイベント入場者は 318,320 人、最近の第 5 回大会（2011 年）のキャッチフレーズは「美ら島の　魂響け　未来まで」、海外参加者は 5,317 人でイベント入場は約 42 万人となっている。

海外からの参加者は、2400、3400、4000、4400、5300 と、増えていっている。まさに繋がっている。出って行っても、出て行ったのではなく、いつでもお帰りなさい、というのが沖縄移民の特質ではないかと考える。イベント参加者は 47 万人、52 万人、26 万人、31 万人、42 万人となっている。

３．世界のウチナーンチュ大会の源泉―沖縄県系移民の現在

世界のウチナーンチュ大会を支えている海外の沖縄系移民は約 40 万人と言われている。現在、沖縄県で把握している沖縄系移民約 40 万人の内訳は、ブラジルが約 19 万人、ペルーが約 7 万人、アルゼンチンが約 2 万 8 千人、ボリビアが 6800 人、アメリカはハワイ移民を含んで約 9 万 8 千人、その他 7200 人となっている[16]。沖縄県でも、海外のウチナーンチュの実数は把握できていない。実数を把握することは難しい。移民 1 世であれば出身地が明確になるが、2 世以降になると、沖縄系であるという選択が個人の判断に任されるケースが少なくない。現在、婚姻は沖縄出身者以外との場合も少なくない状況である。今後はさらに増えていくであろう。そうすると自分の出自がどこかは、個人に選択を任すことになる。2 世、3 世、さらに 4 世になると、自分自身の帰属意識で、選択されていくようになるので、実数をおさえるのは難しくなっていく。

父方祖父が読谷村出身、母方祖父が恩納村出身で日本生まれの13歳の少年が「自分の母国はどっちか」と題した作文のなかで、自分自身は日本生まれのボリビア育ちである。移住学習を通して祖父の出身が沖縄であることを知り、自分はウチナーンチュだと知った、と書いている。さらに世界若者ウチナーンチュ大会に触れ、その活動に参加して、後輩たちにウチナーンチュってすごいんだと思わせたいと述べ、最後に「僕はもうこれから、自分の母国で迷いません。僕は日本人であり、ボリビア人であり、そしてウチナーンチュです！[17]」と結んでいる。このように、本人の帰属意識によって選択されることになる。世界のウチナーンチュ大会は、ウチナーンチュであることを確認（帰属意識）する場でもある。

世界のウチナーンチュ大会も5回を迎え、沖縄でも、日本でも、海外でも、その行事は認知度が高くなっている。世界のウチナーンチュ大会に連動して、各市町村でも世界のウチナーンチュを受け入れ、各地域で関連した行事を開催している。恩納村でも「世界のウンナンチュ大会[18]」を実施している。これは、移民したシマンチュたちが、それぞれのシマに帰ってくることで、シマンチュたちが、歓迎会を開催したり、シマを案内したりする。海外移民が帰国することによって、シマを再確認・認識し、シマンチュの絆をも確認する。シマに残った人たちも絆を意識し、共同体を存続する契機にもなっている。聴き取り調査で、第〇回の世界のウチンーンチュ大会で再渡航したとか、次の世界ウチナーンチュ大会にも再渡航して参加するとか、というようなことを話していた。ブラジルやボリビアから沖縄に行くことも「再渡航」と表現している。海外移民は、世界のウチナーンチュ大会に参加し、親、兄弟姉妹、親戚、そしてシマンチュとの絆を確認して、ブラジル、ボリビアへ再「再渡航」する。

沖縄県では、第1回世界のウチナーンチュ大会を契機に、海外のウチナーンチュネットワークの人的拠点として、ウチナーンチュ民間大使制度[19]も創設している。さらに第3回世界のウチナーンチュ大会のプレイベントとしてウチナージュニアスタディツアー[20]を実施し、翌年度からは規模を縮小して毎年継続的に実施している。

恩納村でも、2000 年から恩納村出身海外移住者子弟等研修生受入事業[21]を開始し、2013 年現在までに 16 人の研修生を受け入れている。16 人の子弟が、祖父母または父母の故郷を体感するという経験を積んだ。このような制度は恩納村だけではなく、他市町村でも実施している。これも海外移民とシマンチュの絆の現れで、沖縄移民の特質のひとつである。

また、第 5 回大会では、次世代継承を目的に「若者・学生事務局」が結成され、海外のウチナーネットワークを通して、国際会議を自主提案・開催し、海外からの次世代代表が参加し、ネットワークの活用について議論が交わされた。その結果、次世代の今後の活動宣言として、世界若者ウチナーンチュ連合会（WYUA）を自ら発足し、第 6 回世界のウチナーンチュ大会に向けて、毎年世界各国持ち回りで開催する「世界若者ウチナーンチュ大会」を提言し、翌年に第 1 回大会をブラジル、第 2 回大会をロサンゼルスで開催した[22]。次世代が、海外移民とシマンチュの絆を活用し、新たなネットワークづくりへと展開していく現れであろう。

以上のようなことから、世界のウチナーンチュ大会には共同体を存続させる機能ももっている。そのことは沖縄移民の特質のひとつであるといえる。続いて、ブラジル移民・ボリビア移民の特徴について、述べる。

Ⅲ．ブラジル移民・ボリビア移民の特徴

1．ブラジル移民の職業（労働）の変遷

本件調査･報告を整理･分析した結果、ブラジル移民の特徴は、(1) フェイラ（フェイランテ）、(2) クストゥーラ、そして (3) カッペン移民に具体的に現れている。つまりブラジル移民の特徴は、職業[23]や労働の変遷とそれに伴う地理的移動である。本件調査・報告のブラジル移民は、フェイラで野菜、パステル等を売った、フェイラで財を築き、現在は店舗を持っている等の証言を多く得た。

フェイラというのは移動定期市、露天市のようなものである。移動といってもブラジルでは毎日、どこかでフェイラが行われている。屋台のようなもので、野菜、花、肉、魚等の生鮮、売る場所が決まっていて、新しく参

入することはできない。フェイラは、地区ごとに開催時間・場所が決められていて管理されている。フェイラは、権利をゆずってもらう。つまり権利を買い取るというしくみになっている。よって自由に参入することはできない。フェイラのなかでもパステラのフェイラが一番儲かると言われている。フェイラの権利は一軒の家を買う値段ほどのものもあるという[24]。

クストゥーラとは、裁縫業で、当時、裁縫業界はシリア系、アラブ系、レバノン系などの裁縫業者の下請業として家内工業的に対応していたようである。B氏は、野菜づくりから出発し、クストゥーラを経て、現在は金物店を経営している。

B氏は19歳の頃、単身ブラジルに渡った。書類上は引受人がいたが、実際、ブラジルに着いてみると引受人が迎えにこなかったので、沖縄県人会が準備した宿で6日間、引受人が迎えにくるのを待ち続けた。引受人が迎えにきたとき、宿にいなかったら困ると思い、飲まず食わずで、ずっと宿から一歩もでないで待ち続けたそうだ。それをみかねた県人会のメンバーが、配偶者がウンナンチュという久米島出身の男性に「イッター　シマヌ　青年が　ドウィチュイ　ウッチャンナゲラレティ　イルグトウチャーニカナランナー」と声をかけたそうだ。その後、その男性が宿に来て、B氏の引受人になった。その後B氏は、野菜づくりをして、野菜をフェイラに出荷する仕事に就いた。その後は、アラブ系の下請としてクストゥーラでズボンの裁縫業をした。B氏を頼って両親、弟達がブラジルに渡航してきた。渡航してきた家族と一緒にクストゥーラをして財を築き、その後は金物店を開業した。現在は金物店を2店舗経営している。B氏を頼ってブラジルへ渡った弟も現在金物店を経営している。

聴き取り調査から、財産を築くには、フェイラ、クストゥーラで仕事をすることが近道だったたような印象を受けた。ボリビアから転住したC氏もフェイラを経て、現在建築資材の会社を経営している[25]。

以上のことからブラジル移民は、職業の変遷と移動に特徴が現れているといえる。

次にブラジル移民にカッペン移民というものがある。カッペン移民は計

画移民と分類したが、ボリビアの計画移民とは異なる。カッペン移民は民間会社が募集し、失敗に終わっている。カッペン移民の生活は非常に厳しく、苛酷であった。カッペン移民でブラジルに渡航した人たちはカッペン移住地のクイアバから、カンポグランデやゴイアニア等、他の地域に移っている[26]。

字安富祖のＤ氏は、第１次カッペン移民でブラジルに渡ったが、第４次カッペン移民を連れてきたトラックに乗り込み、クイアバを去り、カンポグランデに移った。カンポグランでは字谷茶出身のウンナンチュに世話になり、その後はゴイアニアに移動して、野菜づくりをした。現在はバールを経営している[27]。

これらの事例から、ブラジル移民の特徴は一言でいうと「職業や労働の変遷」にあると考えられる。さらに、それに伴って地理的移動していくというところに特徴がある。

２．ボリビア移民の土地所有権の集積過程

戦後、ボリビアへは、1954 年 6 月 19 日の第 1 次移民 275 人を皮切りに 1964 年 4 月 19 日の第 19 次までに 678 世帯 3229 名が沖縄からボリビアへ移住している。ボリビア移民は、琉球政府による計画移民で、ボリビア政府から一家当たり土地 50ha を無償で配布するというものであった。現在、オキナワ移住地の総面積は 4698.9 ㎢（4 万 6890ha）で、南北 60 ㎞、東西約 30 ㎞である。恩納村の総面積は 50.79 ㎢で、南北 27.4 ㎞、東西 4.2 ㎞で、比較するとオキナワ移住地がいかに広いか、想像できる。ちなみに沖縄県の耕地面積は約 3 万 8900ha（2011 年現在）である。それよりもボリビアのオキナワ移住地が広いということになる。

戦後のボリビア移民は、琉球政府が過剰な人口を南米へ移そうとした、という背景があるが、戦前、ベニ県リベルタ市在住の沖縄移民が、第二次世界大戦で廃墟と化した沖縄を救援する目的で「リベラルタ市沖縄戦災救援会」を組織して、義援金の募金活動を始める。その活動のなかから沖縄の人びとを集団的に呼び寄せようという構想が生まれた背景もある。

一方、米軍統治下にあった沖縄でも海外移住政策が検討され、ボリビア移住が決定される。ボリビア移民の背景には、実は安全保障、米軍基地との関連もある。人口増加による社会的不満が高まり、共産主義に感化され、反基地運動へと向かうことを防ぐ目的もあったようである[28]。すなわち戦後の南米移民は、基地存続の側面もある。つまり、国家間の移民政策の側面が強く、米軍の基地存続の政策でもあったということである。米軍基地建設のための土地接収では宜野湾の伊佐浜からブラジルへ移住した人々のことはよく知られているが、ボリビア移民もそのような側面があったということである。さらに戦前にボリビアへ移民したウチナーンチュが、戦争によって廃墟となった沖縄からボリビアへ呼び寄せるという構想がでたということも沖縄移民の特質であろう。

ブラジル移民は労働や職業の変遷とその移動に特徴がみられると述べたが、ボリビア移民の特徴は何か、というと、「土地所有権の集積過程」に特徴が現れているといえる。1980 年代にデカセギが増加し、ブームになる。その前に水害や旱魃が起き、ボリビアで生活することが厳しくなる人たちがでてくる。さらに家族の個々の問題が解決できず、家族が維持できない状況も同時に現れる。そうすると沖縄に戻るという選択肢をせまられるという状況もでてくる。つまり、家族の生活が維持できない、護れないという状況のなか、他国へ転住する、日本に移住するというような状況もでてくる。土地を処分して、沖縄に帰るということになる。そうすると残った人たちが土地を購入していく。さらに 1 世、2 世がデカセギに出て、土地を購入して、自分たちが所有する土地を増やしていく。つまりボリビア移民の特徴は、土地所有権の集積過程にあるといえる。

例えば、字南恩納出身の E 氏は配偶者と息子二人、実弟とボリビアに渡り、50ha の土地を得た。E 氏の 50ha は、現在、息子たちが管理している。長男 E1 氏はサンタクルスに住んでいるが、オキナワ移住地に土地を購入している。三男 E3 氏は E1 氏の土地と自分の土地で肉牛を放牧している。E 氏の土地は四男 E4 氏が管理していたが、現在は五男 E5 氏が乳牛を放牧している。さらに E4 氏は土地を買い農業をしている。E 氏の息子達は

日本にデカセギに行きそのお金で、土地を購入し、現在では約 500ha の土地を所有している。土地は引揚者等から購入したようである。現在、オキナワ移住地の一世帯の土地所有面積は、平均 300ha という[29]。

1954 年 6 月 19 日の第 1 次移民から 1964 年 4 月 19 日の第 19 次移民までの家族世帯は 555 世帯、3,106 人、単身世帯は 123 世帯、合計 678 世帯、3,229 人である。当時の世帯は、入植 50 年後の 2004 年現在 60 世帯、318 人で、定着率は 8.85％である[30]。当初の世帯主の定着率は 8.85％と低くなっているが、E の家族のように、世帯主が故人となり、当初の配耕地を子孫が管理・所有しているケースもある。『沖縄タイムス』の記事によると、現在は 248 家族、909 人となっている[31]。先述したようにボリビア移民の特徴は土地集積過程に現れている。つまり土地集積過程には、移民世帯の減少・移民世帯の移動の要因が現れているからである。土地所有の集積過程の調査と、さらなるボリビア移民の特徴の解明は、今後明らかにしていく。

以上、ブラジル移民とボリビア移民の特徴について考察した。続いてブラジル移民・ボリビア移民と共同体について述べる。

Ⅳ　ブラジル移民・ボリビア移民と共同体

１．判断枠組

事例を通した考察の過程から、沖縄出身移民の特質として (1) 国家の移民政策、(2) 個人の海外雄飛、(3) 家族の維持（保護）、(4) 共同体の存続－シマンチュの絆、これらの 4 要素が、移民個々人によってその強弱が個別的に現れ、この 4 要素は沖縄移民の特質と結論づける。

移民研究では、国家の移民政策や個人の海外雄飛はよく検証され、通説となっている。家族の維持（保護）についても、地域誌等の証言には多く登場する。しかし、「共同体の存続－シマンチュの絆」については、これまでの移民研究にはない新たな判断枠組（要素）であり、特質である。これは、恩納村出身のブラジル移民・ボリビア移民に凝縮され現れている。その特質が恩納村の場合は「イノーの豊かさとそれに基づいた人間の豊かさとチムグクル」という特徴をもっていると考えられる。

先述したように、海外のウチナーンチュの潜在的絆意識を世界のウチナーンチュ大会は顕在化させ、現在も継続しているという事実と、本件調査・報告の過程から、母村との絆が、ウチナーンチュ、ウンナンチュ、シマンチュの絆として現れ、それは共同体の存続という機能をもっていると考えられる。では、いくつかの事例をとおして、恩納村とブラジル移民・ボリビア移民の絆について述べる。

２．恩納村とブラジル移民・ボリビア移民との絆

沖縄移民の特質が世界のウチナーンチュ大会に現出していると、先述した。沖縄と移民の絆ということを考えたときに、送り出しである母県沖縄が５回も世界のウチナーンチュ大会を開催し、参加者が年々増加しているということは、「棄民」という関係は成り立ちにくい。聴き取り調査では、他府県出身者の１世、２世が集まっている場に参加し、それぞれの体験を聴く機会があった。参加者は９人で、富山、佐賀、高知、山口、熊本、広島、長崎、山形の出身であった。参加者に出身地を尋ねると迷わず出身地を応えてくれた。しかし、２世のＦ氏は両親の出身地が大阪と奈良であった。Ｆ氏は出身県よりも日系であるということでいいのではないか、と言い、なぜ沖縄にこだわるのか、なぜ恩納村にこだわるのか、と筆者に問いかけた。

Ｆ氏には、沖縄が「ウチナーンチュ、ウンナンチュ、シマンチュ」というように県・村・字というような三層構造で共同体が存続し、共同体の基層をなしているのがシマンチュであり、沖縄移民の源泉はシマンチュにあるということは理解できなかったようであった。

例えば沖縄からサントス港についたウチナーンチュを沖縄移民が出迎えたときにもシマンチュごとのもてなしであったそうだ。那覇出身のＧ氏は、那覇からの移民が少なく、出身地のシマンチュが迎えてくれなくて寂しい思いをしたと話していた。でも同じウチナーンチュということで、他市町村のシマンチュからたくさんのごちそうを分けてもらったそうだ[32]。

先述した引受人が書類上のものでブラジル到着後も宿で飲まず食わずの

状態が続いた字塩屋出身のＢ氏も県人会の男性の配偶者がウンナンチュだということで、引受人になってくれたといい、第１次カッペン移民の字安富祖出身のＤ氏も、カンポグランで字谷茶出身のウンナンチュに世話になった、ということからもわかるようにウチナーンチュ、ウンナンチュ、シマンチュというような三層構造で、共同体が存続していることがわかる。

Ｆ氏が国際会議に出席したとき、隣にいた日本人が「北米移民は国を棄てたけど、南米移民は国に棄てられた。棄民だ」と言われ、驚いたそうだ。どういうことなのか、帰国して歴史を調べてみると、やはり南米移民は棄民だと思ったと話していた。他府県出身の移民と母村がどのような関係にあるのか、言及できないが、沖縄と海外移民との関係は、先述したように繋がっている、絆がある。棄てた、棄てられたという棄民意識が低い。そういうことを考えたときに、やはり沖縄移民の特質はそこにあると考えられる。離れていても、母村とつながり続けている。つまり離れていてもシマの精神的構成員として存在し続けているということになり、シマンチュの絆で繋がっているということである。

では、恩納村と恩納村出身移民はどのように繋がっているのか、ここでいくつかの事例をとりあげる。

ボリビアで、字南恩納出身のＨ氏に恩納村村人会の結成のきっかけを聴いたら[33]、恩納村出身者の子弟の交通事故がきっかけだったそうだ。怪我をした恩納村出身の子弟が日本に治療に行くとき、当時は経済的にも厳しいなか、第一、第二の移住地のウンナンチュがみんなでお金を集めて旅費をつくって渡した。この事故をきっかけにウンナンチュ同士が声を掛け合い、集まるようになったという。

さらに、Ｈ氏が恩納村は他の市町村とは違うと、話していたのでその根拠は何なのか、Ｈ氏と村人会役員Ｉ氏に聴き取り調査を行った。そこでつぎのようなことを話してくれた。

ボリビアで厳しい時期（恐らく水害や旱魃で厳しく移住地から転住していく人たちがでた頃だと思われる）、農業の建て直しのために、恩納村に

助け求め、援助を求めたところ、まとまったお金を送ってくれた[34]。それを村出身の世帯主で配分し、農業の再建資金に充てた。ボリビアから引揚げていく人はそのお金を恩納村人会に返した。その後、恩納村から返金しなくて良いとの連絡があり、引揚げ者が返金したお金は、子弟が大学や高校へ進学する際の学資として給付した。金額が少なくなったので、村人会の予算から補充し、現在でも奨学金として大切に運営している。

Ｈ氏とＩ氏は、現在、恩納村出身が移住地に多く残ったのは、恩納村の支援があったからであり、他の市町村とは異なるということを強調していた。このことは、恩納村とボリビア移民との絆が象徴的に現れている。

３．共同体の存続　―シマンチュの絆

聴き取り調査では、ウチナーンチュ、ウンナンチュ、シマンチュに世話になった、という証言も多かった。また、先述したブラジルへ単身で渡り、現在では金物店を２店舗経営しているＢ氏は中学卒業後、親戚の店を手伝うため、那覇に移り、住み込みの仕事をしていたため、渡航時のブラジル沖縄移民名簿[35]では出身地は那覇になっている。しかしＢ氏は、恩納村人会会長も務め、今回の調査でもウンナンチュとして、調査に協力してくれた。調査では、ウンナンチュ以外のウチナーンチュにも随分世話になった。豊見城出身のＪ氏は、義兄が恩納村出身ということと、自分自身もウチナーンチュということで、仕事を休み調査に協力してくれた。改めて、海外でのウチナーンチュ（シマンチュ）同士の絆、母村（ウチナー、シマ）と移民との絆を実感する調査であった。

つぎに共同体の基礎である家族の関係をＫ氏家族について取り上げる。ブラジル２世K1氏は、恩納村のことが大好きで、何度か恩納村にも訪れている。筆者の空港到着時には、K1氏は息子K2氏と娘K3氏をつれて、出迎えてくれた。筆者がホテルにチェックインした頃、K2氏とK3氏をつれてホテルを訪ねて、夕食を誘ってくれた。K1氏は渡航時の世帯主Ｋ氏からすると三男で、K2氏とK3氏は孫になる。後日、K1氏と妹K4氏そしてK2氏から聞き取り調査を行った。K4氏がつぎのような証言をし

てくれた。

「お父さんはとても達筆で、毎日日記を書いていたので、いつかその日記を読みたいと思っていました。ある日、お父さんが、裏庭でその沢山の日記を燃やしていたので、『どうして日記を燃やすのですか、私はお父さんがどんな経験をしてきたのか、日記を読みたい』とお父さんに言いました。そしたらお父さんは、『日記は人に読ませるものではない。自分の慰め物だよ』と言いました。お父さんが日記を燃やしたのは、お父さんの視力が弱くなり、字が読みにくくなった頃でした。」

K4 氏の証言から父親が日記を燃やすという行為、そして自分自身にとって日記は慰めものだと言っていた、ということから一世の並々ならぬ苦労があったことは容易に想像できる。一世の苦悩、そして子孫にその苦労を残さないようにつとめた父親の想いであろう。さらに証言してくれた家族からは世帯主である父親 K 氏に対する尊敬、敬意、深い想いを聴き取り調査中、ずっと感じるものであった。孫の K2 氏と K3 氏は、夕食時に片言の日本語で筆者に祖父がどういう人であったかを一生懸命話していた。筆者が K3 氏に「おじいさんとの思い出のなかで印象に残っていることはなんですか」と質問したら、K3 氏は「言葉はできなくても、心をもって接すれば、必ず伝わる、と言われたことが心に残っています」と涙をいっぱいためて語った。この家族と世帯主であった一世の関わり、絆を強く感じた。さらに K1 氏からは、沖縄や恩納村に対する強い想いも伝わった[36]。このような家族の絆の上に、シマンチュの絆の多様性をみることができる。

K1 氏が、恩納村に来訪時にシマンチュが開催した歓迎会に出席したとき、シマンチュに「アンシ　ヒンスムンヤタムンヌ　ヒンスムンだったのにね」と言われ、「ヒンスムン」の意味がわからず、ホテルに戻って「ヒンスムン」の意味を尋ねると、「ヒンスムンは貧乏人」という意味だと教えられ、涙が溢れた、と当時のことを思いだし、涙ぐんだ。K1 氏の真意を確かめることはできなかったが、父親の母村での状況とブラジルでの生活等が走馬灯のようによみがえったのであろう。現在、K 氏家族は社会

的には高い地位にある。そうであるがゆえにシマンチュから「ヒンスムン」と言われたことに胸を熱くしたのだろう。

では、シマンチュの言う「ヒンスムン」は、どの程度の生活レベルをさしているのか、ブラジルへ渡航するということは、渡航費用が必要である。K1 氏から父親 K 氏の渡航時の状況を聴くことはできなかったが、K 氏の出身地である安富祖は水田どころで、部落の西側に個人有の高倉が群をなしていた。県道開通（1914 年）前は、山原船の停泊地で、十二反船もあり、約十隻入る日もあった。県道開通後は、船は海岸に停泊し、川から伝馬舟が入ってきて物資を乗せ、本船に積み込んだ穀税を湖辺底喜まで運送する十二反村船が 1 隻、安富祖在の山原船が 3 隻あった。山原船は薪、竹茅、竹束、丸太などの林産物、砂糖、藍玉などを運送していた。喜瀬武原の物資もここから那覇・泊に運送していた。1917 年頃には県道と喜瀬武原道に料亭もあったようだ[37]。海、山、畑、水田等があり、豊穣な集落であった。ただし、そのような村の性格上、そこでは貧層の階層意識が成立していた可能性がある。

K 氏と同じ安富祖出身の L 氏は、渡航前に自家用車をもっていた。渡航前は 7 人の子どもがいた。L 氏は経済的に厳しい状況ではなかったが、子ども達の将来を考えて広いブラジルへ渡ったそうである[38]。安富祖からブラジルへ渡った人たちの渡航前の生活レベルについて詳細な調査が必要だが、K1 氏がいわれた「ヒンスムン」は、経済的に貧しくて、食べることも、生活することもできなった状況とは考えにくい。K1 氏の「ヒンスムン」とシマンチュの「ヒンスムン」の概念のズレがあったと思われる。

当時の恩納村はヒンスムンと言っても、食べられないといった状況ではなかったと思われる。それは、集落の目前には、海、イノーが広がり、海に行けば捕って食べ物を得ることができる環境であった。豊かのイノーが目前に広がっている。さらに屋敷にはアタイグァがあって家族が食べる分の野菜が採れるという状況だった。K 氏や L 氏は、家族が増えていくなかで、家族がもっと自由にたくさん食べられるため、シマンチュがたくさん食べられるため、もっと生活を豊かにしていくため、海外へ出ていった

可能性がある。

聴き取り調査のインフォーマントの出身地は、字安富祖、字南恩納、字恩納、字山田等であった[39]。これらの移民した人は、集落のリーダー的存在、南洋引揚者等である場合が少なくなかった。これから、さらに調査を行い検証していかなければならないが、シマをでていくということは、シマの豊かな限りある資源の分け前をより多くシマンチュに分配できるため、シマンチュの豊かな暮らしが存続できるということにもなる。つまりシマを出て行く、海外に出ていくということは、共同体を存続する機能もあったと考えられる。

４．共同体の生活基盤としてのイノー―コモンズの海

沖縄移民の判断枠組として (1) 国家の移民政策、(2) 個人の海外雄飛、(3) 家族の維持（保護）、(4) 共同体の存続－シマンチュの絆を提示た。いくつかの事例のなかから「(4) 共同体の存続―シマンシュの絆」についてみていく。

恩納村の場合、沖縄移民の判断枠組である「(4) 共同体の存続―シマンチュの絆」は、「恩納村のイノーの豊かさとそれに基づいた人間の豊かさとチムグクル」に現れていると考えられる。海岸沿いの集落にとってイノーは、シマンチュにとってコモンズの海であり、共同体の基盤をなしていた。恩納村は、イノーがもたらす海の幸にも恵まれ、自家用としての魚介類に事欠くことはなかったそうだ。

ブラジルやボリビアのウンナンチュたちは、イザイの経験を誰もがもっていたと思われる。実際、聴き取り調査のなかでは、91 歳で 1 世の M 氏は蛸をとった話をすると表情がいっぺんに明るくなった。アーサーのことを話しながら「アリヤ　カバサンドウヤー」とアーサーの香りを何十年経っても語る M 氏の姿があった。このような語りは、恩納村のイノーの豊穣さ、そして生活がイノーに支えられていた証ではないかと思われる。

K 氏や L 氏の出身地である安富祖では、昭和 40 年代前半まで年に 2 回区民総出のンナトゥサグイ（河口で小魚を獲ること）を行っていた[40]。シ

マンチュは、イノーで各自が食べられる分だけの漁を行っていた。区民総出で捕獲したものはシマンチュ同士で平等に分けられ食されていた。不平等がおきないように、無限ではない海の恵をシマンチュが護り、管理し、大切にして生活の基盤にしていた。イノーの豊かさ、コモンズの海がシマンチュの豊かさとチムグクルを育み、それが恩納村の移民の特徴となって現れていると思われる。筆者は沖縄移民の判断枠組を導きだした。そして、その判断枠組を踏まえて恩納村出身移民の特徴を「恩納村のイノーの豊かさとそれに基づいた人間の豊かさとチムグクル」と結論づけた。今後は、シマンチュからの聴き取り調査等を行い、検証していきたい。恐らく、シマンチュの絆・シマンチュの精神世界もみえてくるだろう。

筆者は、ウンナンチュとは、ウチナーンチュとは、沖縄の文化とは、ということを問い続けた。その応えを端的に示したのが、ボリビア第二移住地の三世 N1 氏（12 歳）の「肝心文化　根付かせた一世　ウチナーへの想い　海を渡れ」という琉歌だった[41]。また、2013 年度海外移住者子弟等研修生の N2 氏は、ボリビア移民三世で、N1 氏とは従姉になる。N2 氏は「恩納村知らずして　沖縄は語れない」という作品を書道の研修成果として提出している。また研修生報告会[42]で N2 氏は、「恩納村は素敵な場所で、海、人々、村の風景全てが好きでインターネットのフェイスブックを通して恩納村がどれほどきれいな場所かをお友達に案内しています」、そして「私の祖父母が恩納村出身である事を神に感謝します」と述べ、最後に「ボリビアに帰ったら全員に恩納村のお話をし（ママ）又、スペインにいるお友達にも報告し世界中の皆様に恩納村を知らずして日本を語れない！と伝えます。ありがとうございました。ニフェーデービタン！」と結んでいる[43]。N2 氏の日誌 3 日目には、海水浴を楽しんだ様子、6 日目には海亀の放流、翌日には高台から海を眺めたこと、その後もシューノーケーリング、ビーチパーティ等の海の記述が多くみられる[44]。

琉歌を詠んだ三世 N1 氏は、まだ沖縄を訪れたことはない、N2 氏は二度目の沖縄であった。彼女たちにとって祖父母の故郷恩納村の「海（イノー）の文化」は実体験としてはない。貨幣では得られない、チムジュラサ（心

の清らさ)、人の豊かさ、海の豊かさ、イノーの豊かさをどこから感じとったのか、それは一世たちの想いを受け継いでいるのではないか、そして恩納村の地理的特徴ではないかと思われる。N1 氏と N2 氏の祖母 N 氏から聴き取り調査をした際、古いアルバムをめくり、シマを離れた時のこと、開拓当初のこと、故郷への思い、現在にいたる体験等を話してくれた。そのなかで、ヨウジマ（恩納小中学校の裏手の海）の写真を手にとり、辛いときにはこの写真をみて耐えたと話していた。N 氏の妹 N3 氏もヨウジマでの思い出、イノーでのイザイの話はつきない。アーサ、モズクなどの海藻類やシャコガイ、サザエ、魚など捕れた魚貝類はイザイにいけなかったシマンチュにも分けたという[45]。筆者も N3 氏と一緒にイザイをした経験があり、恩納村のイノーの豊かさと捕ったものを分配し食す、という記憶をもっている。

以上のことからもわかるように、イノーは生活基盤であった。

恩納村の西側の東シナ海に面した約 27 ㎞にわたる海岸は、琉球政府時代の 1965 年に「沖縄海岸政府立公園」に指定され、復帰後も「沖縄海岸国指定公園」となった。この海岸は、屈曲した岬角、入江の連続、干満によって趣の変化をつくるリーフ、リーフ内側の綾なす海色の美しさは絶景である。さらにイノーがもたらす海の幸にも恵まれ、自家用としての魚介類に事欠くことはなかったと言う。また肥料用としての海草やウニなどの採取もできた。シマンチュにとってイノーは、共同利用の場であり、生活の基盤であった[46]。

1960 年代に大量発生したオニヒトデを恩納村は人海戦術で駆除したと聞いた[47]。また米軍の都市型訓練所建設[48]に対してもシマンチュの人海戦術で阻止した。これらのことは「恩納村方式」と呼ばれている。シマンチュで海を守る、村を守ったという経験がウンナンチュには強く残っていると思われる。

一方、国際海洋博覧会以降、コモンズの海はさんご礁の広がる美しい海岸線が観光資源として注目され、大型リゾートが建ち並んでいる。生活基盤であったイノーが、観光資源へと転化し、共同体の場としての役割が変

化してきている。しかし、コモンズの海（イノー）は、沖縄移民の精神世界に生きている。

V　おわりに―今後の課題

以上、沖縄移民の判断枠組として（1）国家の移民政策[49]、（2）個人の海外雄飛[50]、（3）家族の維持（保護）[51]、（4）共同体の存続―シマンチュの絆の４要素を導き出した。これらの要素は、移民個々人によって、その強弱が具体的・個別的に現れると考えられる。今後は、個別・具体的に調査・分析を行っていく。そうすることによって沖縄移民のシマンチュ（共同体）ごとの特徴も浮きぼりになると思われる。４つの特質のなかで、本稿では沖縄移民の特質のひとつとして、共同体の存続－シマンチュの絆を抽出したが、今後はこれらの特質のなかで、沖縄移民の本質は何かについて論究していく。

---

[1] この報告は、2013 年 10 月 25 日（金）、14:00 ～ 16:00、恩納村役場 2 階会議室にて『恩納村誌』移民分野海外調査報告会（一般公開）で報告されたものである。この報告は沖縄タイムスで取り上げられた。記事のみだしは次のとおり。「恩納村誌　再編に力」「海外調査で収穫役場に展示」2013 年 10 月 29 日（22）。報告会でのレジュメ・資料等は次のとおり。※ 個人を特定する可能性のある情報（氏名等）については、アルファベット表記に改めた。

海外調査報告会レジュメ

20131025『恩納村誌』移民分野　海外調査報告

恩納村出身のブラジル・ボリビア移民

2013 年 10 月 25 日（金）14:00～16:00
恩納村役場 2 階会議室
石 川 朋 子（沖縄国際大学）

目　次

第１章　はじめに
　第１節　本報告の目的
　　ブラジル・ボリビアの移民調査の概要と成果
　第２節　調査概要
　　１．調査日程　＊詳細については資料１参照
　　（１）調査期間　2013 年 8 月 30 日（金）～9 月 24 日
　　（２）調査国　　ブラジル連邦共和国、ボリビア共和国
　　２．調査員
　　（１）X 氏
　　（２）石川朋子　沖縄国際大学非常勤講師（移民研究）
　　３．調査目的
　　恩納村創制 100 周年事業『恩納村誌』移民分野をより充実しものにすることが目的である。移民を経験された方々のあゆみも恩納村の歴史ととらえ、後世へ伝えるよう記録する。ブラジル、ボリビアで活躍されているできるだけ多くの村出身者に聞き取り調査を行う。「海外調査のしおり」より
　　４．調査方法
　　聴き取り調査
　　５．調査数　　インフォーマント総数　　人（内石川責任調査 91 人）
　　（１）ブラジル　総数　　人（石川責任調査 57 人）
　　（２）ボリビア　総数　　人（石川責任調査 34 人）
　第３節　私と移民と恩納村
　第４節　調査の成果
　　沖縄移民の特徴を踏まえて恩納村出身移民の特徴を概念化
　　「恩納村のイノーの豊かさとそれに基づいた人間の豊かさとチムグクル」

第２章　沖縄移民の特徴
　第１節　移民の形態
　　１．移民の主な目的
　　出稼ぎ的移民／定住的移民
　　２．移民の種類
　　契約移民／自由契約移民／計画移民
　第２節　世界のウチナーンチュ大会
　　第１回
　　開催期間　　1990 年 8 月 23 日（木）～8 月 26 日（日）
　　開催場所　　沖縄コンベンションセンター、宜野湾市立体育館、他
　　ｷｬｯﾁﾌﾚｰｽﾞ　世界のウチナーンチュがやってきた!!
　　海外参加者　約 2,400 人
　　第２回
　　開催期間　　1995 年 11 月 16 日（木）～11 月 19 日（日）
　　開催場所　　沖縄コンベンションセンター、宜野湾市立体育館、他

キャッチフレーズ　海を越え、言葉を超えて
海外参加者　約 3,400 人
第３回
開催期間　2001 年 11 月 1 日（木）～11 月 4 日（日）
開催場所　沖縄コンベンションセンター、宜野湾市立体育館、他
キャッチフレーズ　未来―ちゅら夢　心にのせて
海外参加者　約 4,000 人
第４回
開催期間　2006 年 10 月 12 日（木）～10 月 15 日（日）
開催場所　沖縄コンベンションセンター、宜野湾市立体育館、他
キャッチフレーズ　ひろがるチムグクル　つなげるチムチュラサ
海外参加者　約 4,400 人
第５回
開催期間　2011 年 10 月 13 日（木）～10 月 16 日（日）
開催場所　沖縄セルラースタジアム、沖縄コンベンションセンター、他
キャッチフレーズ　美ら島の　魂響け　未来まで
海外参加者　約 5,300 人

第３節　沖縄県系移民の現在
沖縄県系移民　約 400,000（内南米 29 万人）　2011 年現在
ブラジル　190,000 人
ペルー　70,000 人
アルゼンチン　28,000 人
ボリビア　6,800 人
アメリカ　98,000 人　＊ハワイ含む
その他　7,200 人

第３章　ブラジル移民
第１節　ブラジル移民の概要（特徴・背景）
第２節　恩納村出身のブラジル移民
第３節　小結

第４章　ボリビア移民
第１節　ボリビア移民の概要（特徴・背景）
オキナワ移住地　恩納村
総面積：4698.9k ㎡（4 万 6,890ha）　50.79 k ㎡（2004 年）
南北 60km、東西約 30km　南北 27.4km、東西 4.2km
耕地面積：43,935ha（2002 年）
※沖縄県の耕地面積約 38,900ha（2011 年）
第２節　恩納村出身のボリビア移民
第３節　小結

第５章　おわりに
第１節　本調査の成果
第２節　謝　辞

海外調査報告会配布資料

石川朋子による海外調査インフォーマントリスト（責任調査）

○○○○家（氏）の場合
(1)世帯／渡航時の家族・年齢
(2)出身地
(3)渡航前の職業
(4)移民の種類（自由移民・契約移民・計画移民）
(5)渡航地年月日・船名
(6)渡航後の家族・出生地
(7)移動内容・職業・現住所
(8)家族の現在（異動、現住所、2・3 世等）
(9) 聴き取り（インフォーマント・世帯主との続柄／調査日／調査概要）

A.ブラジル移民

a.恩納村出身（16 世帯 45 人）

１．A 氏
①a・本人／2013.9.1（恩納村村人会主催歓迎夕食会時）
２．B 氏
②a・本人／2013.9.1、2013.9.12
３．C 家
③a・長男／2013.9.1
４．D 氏
④a・本人／2013.9.4
５．E 家
⑤・二女／2013.9.6
６．F 家
⑥a・長女、⑦b・二女、⑧c・三女、⑨d・二男、⑩e・四女、⑪f・五女、⑫g・三男、⑬h・五男、／2013.9.6、⑭i・四男、⑮j・四男配偶者、⑯k・四男息子、⑰l・四男息子、⑱m・長男娘、⑲n・長男娘、⑳o・長男娘、　㉑p・長男娘／2013.9.5
７．G 家
㉒a・三男、㉓b・五男／／2013.9.8
８．H 家
㉔a・配偶者／2013.9.8
９．I 家
㉕a・二女、㉖b・二女孫／2013.9.9.
１０．J 氏
㉗a・二女／2013.8
１１．K 家
㉘a・四女／2013.9.9
１２．L 家
㉙a ・三男、㉚b・次女／2013.9.10、㉛c・三男息子、㉜d・三男娘
１３．M 家
㉝a ・三女／2013.9.9
１４．N 家
㉞a・三男配偶者／2013.9.8、㉟b ・三女、㊱c・娘婿、㊲d・三女の娘、㊳e・三女の孫、㊴f・三女配偶者／2013.9.9
１５．O 家
㊵a・配偶者／2013.9.12
１６．P 家
㊶a・本人、㊷b・母、㊸c・弟、㊹d・長男、㊺e・弟／2013.9.19

b.社会組織、恩納村出身以外等（3 件 13 人）

1．サン・マテウス沖縄県支部／㊻a 支部長、㊼b 支部長
2．ブラジル沖縄文化センター／㊽a 会長
3．恩納村出身以外
㊾a 日系２世（父母出身地：大阪・奈良）
㊿b（富山）、(51)c（佐賀）、(52)d（高知）、(53)e（山口）、(54)f（熊本）、(55)g（広島）、(56)h（長崎）
(57)i（山形）、(58)j（ポルトガル１世）

c.調査協力者

真栄城徳平、津嘉山敏夫、大城孝三、真栄城秋雄、安谷屋久子、当山美根子、渡辺美智子、国吉プリシーラ千恵美、国吉薫、国吉恵子

B.ボリビア移民

a.恩納村出身（10 世帯 27 人）

1．A 家
①a・五男／2013.9.2
2．B 家
②a・長男／2013.9.4、③b・二男娘／2013.9.21
3．C 家
④a・配偶者、⑤b・長男、⑥c・二男／2013.9.14、
⑦d・四男／2013.917、⑧e・二男息子／2013.9.17
4．D 氏
⑨a・世帯主、⑩b・配偶者／2013.9.16
5．F 家
⑪a・本人、⑫b・長男、⑬c・長男嫁／2013.9.16
6．G 家
⑭a・長男配偶者／2013.9.17
7．H 家
⑮a・三女／2013.9.17
8．I 家
⑯a・息子、／2013.9.17、⑰b・孫（修の長女）／2013.9.17
9．J 家
⑱a・配偶者、⑲b・四男、⑳c・長男、㉑d・三男、㉒e・二男娘、㉓f・長女娘、㉔g・四男娘、
㉕h・四男娘、㉖i・四男配偶者
１０．K 家
㉗a・孫、／2013.9.13

b. 社会組織、恩納村出身以外等（6 件 7 人）

1．オキナワ日本ボリビア協会／㉘a 会長
2．ボリビア沖縄県人会／㉙b 会長
3．CAICO 生産・加工工場・第一移住地／㉚a 組合長
4．恩納村村人会／㉛a、㉜b
5．CAIKO（コロニア沖縄農牧総合協同組合）／㉝a 総支配人、㉞b 前事務局長
6．サンタクルス中央日本人会／㉟a 会長、㊱b 事務局長

c.調査協力者

真栄城徳康、真栄城一夫、真栄城豊、真栄城初子、真栄城弥生、佐渡山安栄、津嘉山修

[2] シマンチュの精神世界は、沖縄の死亡広告にも現われている（玉城隆雄「死亡広告にみる沖縄共同体の諸相」『沖縄国際大学教養部紀要　第 17 巻第 18 号』1992 年、pp.125-154）。

[3] 玉野井芳郎は「地先の海」を「コモンズとしての海」と捉え、沿海村落にとっての「共同の場」であると述べている（「コモンズとしての海―沖縄における入浜権の根拠―」沖縄国際大学南島文化研究所『南島文化研究所所報　第 27 号』1985 年 12 月 25 日、pp.1-3、〈鶴見和子・新崎盛暉編『玉野井芳郎著作集　第 3 巻　地域主義からの出発』学陽書房、1990 年 3 月 10 日〉pp.231-238　所収、以下『玉野井著作集』とする）。多辺田政弘は、「イノーは海の畑」であり、「入会（コモンズ）の畑」であるとしている（前掲書『コモンズの経済学』学陽書房、1990 年 4 月 10 日、pp.244-245）。後掲注 45、46 参照。

[4] 南米移民には財産を沖縄に残して渡航した人も少なくないが、傾向としては定住することを目的に渡航していた。南米移民には、子孫が沖縄に戻り、財産を継ぐまたは処分し、再渡航するというようなこともある。このような事例も含めて、分類枠組についても検討する必要があるが、今後の課題としたい。

[5] 本稿でいう 2013 年 9 月 1 日から 9 月 21 日までの聴き取り調査は、注 1 の報告会で報告されたものである。注 1 のインフォーマントリスト参照。

[6] 拙稿「沖縄南洋移民に関する一考察」沖縄国際大学大学院地域文化研究科『沖縄地域文化論叢第 3 号』2000 年 9 月 30 日、pp.99-121

[7] にしめ じゅんじ。1921 年 11 月 5 日～ 2001 年 11 月 10 日（満 80 歳没）。1978 年から 1990 年まで三期 12 年、沖縄県知事を務める。

[8] 琉球新報社編『戦後政治を生きて―西銘順治日記』、株式会社琉球新報出版、1998 年、pp.43-44。

[9] 同上書、pp.295-296。

[10] 『琉球新報』1979 年 1 月 1 日（3）

[11] 前掲書『戦後政治を生きて』pp.404-405

[12] 同上書 pp.431-434。長官との会談調整が難航し、万策尽きたかと思われたとき、当時の知事公室国吉真暢室長がハワイ沖縄県人会の東恩納良吉会長に相談した。東恩納県人会長がハワイ選出のスパーク・マツナガ上院議員を通じて国防総省と調整して、西銘県知事とワインバーガー長官の会談が実現した。

[13] 同上書 p441。

[14] 同上書 p441。同行した嘉数昇明県議（当時）は、その時のことをウチナーンチュのルーツを大切にしようという雰囲気だったと語っている。

[15] 第 1 回から第 4 回は沖縄県知事公室交流推課 HP http://www.pref.okinawa.jp/site/chijiko/koryu/honka/15970.html、第 5 回は全国知事会先進政策バンク HPhttp://www.seisaku.nga.gr.jp 及び世界若者ウチナーンチュ連合会事務局沖縄本部 HP http://yuao.org/the5thwuf/event/mainevent/wufex、第 1 回から第 5 回のキャッチフレーズについては、沖縄県文化観光スポーツ部観光政策課による（2013 年 10 月 24 日聴取）。

[16] 沖縄県文化観光スポーツ部観光政策課による（2013 年 10 月 24 日聴取）。

[17] 「ハイサイ・オーラ・オイ　南米児童の作文から」『沖縄タイムス』2013 年 10 月 14 日（21）

[18] 恩納村では、世界各国で活躍するウンナンチュの人的ネットワークを拡大し恩納村と世界の架け橋として継続的に交流促進するため世界のウチナーンチュ大会開催期間に世界のウンナンチュ大会を開催している。2011 年の世界ウンナンチュ大会の式典で、アルゼンチンから参

加した上間正信氏は、ウンナンチュを代表して「懐かしい故郷に帰ってきて、いつも変わらぬウチナーンチュぬ肝ぐくる、人情、イチャリバチョーデーの温かいおもてなし、励ましのお言葉にとても感謝感激、喜んでいます」と挨拶を述べている（「広報おんな　2011 年 11 月号 365 号」p16）。第 3 回大会については「広報おんな　2001 年 12 月号　no250　p2」、第 4 回大会については「広報おんな　2006 年 12 月号 no306　p6」を参照。

[19] 民間大使制度の意義として、各方面に亘る沖縄と海外ウチナーンチュ社会の活性化と発展、ウチナーンチュのアイデンティティの確認などを挙げている。民間大使の役割として①本県の国際交流及び国際協力についての提案・助言、②本県からの依頼に対する便宜供与及び連絡調整、③国内外における沖縄の紹介等による本県のイメージアップ、④県人会等との連携による現地社会との交流の促進、⑤在住国・地域の状況に関する情報提供などとしている。２年の任期で 100 人の認証者枠、4 万円／年を各大使へ支給していたが、平成 16 年度に改正し、任期や認証者枠を設けず、無償で沖縄県系人に限らず、「沖縄」をキーワードに各界各層関係者も対象とする「新ウチナー民間大使」制度としてリニューアルした。平成 25 年 9 月現在、28 ヶ国・地域で 227 人の新ウチナー民間大使が認証を受けている。同大使が沖縄と海外との交流の架け橋となり、ウチナーないしウチナー的なものをテーマとする様々な分野において、世界にネットワークを形成し、各方面に亘る沖縄と海外ウチナーチュ社会の活性化と発展、ウチナーンチュアイデンティティの確認、ウチナーンチュのステイタスの確立、アジア・太平洋地域の発展に寄与する地域の形成などへの貢献を試みている（沖縄県知事公室交流推進課、前掲「全国知事政策バンク」）。

[20] ウチナージュニアスタディーツアーは、海外県系人子弟を沖縄県に招待し、県内の中高生とともに、沖縄の歴史、文化、自然などの体験学習をとおして、母県・沖縄との絆を深めることにより、県系人社会の発展とウチナーネットワークを担う次世代の人材育成に貢献することを目的としている。事業内容（平成 25 年度実績）はつぎのとおり。実施時期：8 月 4 日～8 月 10 日（7 日間）、参加者：①海外参加者は 12 歳～ 20 歳までの海外県系子弟（中学校・高等学校相当在学中の者）16 名（内青年リーダー 1 名）、②県内参加者は沖縄県内の中学・高校生 16 名（内青年リーダー 1 名）、学習プログラム：①自然学習／沖縄の自然や動植物等にふれあいながらその大切さを学ぶ。②歴史学習／沖縄の歴史的な史跡等を巡り、沖縄の歴史と琉球王朝時代のロマンに触れる。③文化学習（伝統工芸・芸能体験）／沖縄の歴史から生まれた工芸・芸能等の文化を知り体験する。④平和学習／沖縄の戦跡等を巡り、戦争の歴史を学ぶとともに、沖縄が訴える平和を考える。⑤社会学習／沖縄での生活を経験し、沖縄の現状を学ぶ。⑥移民学習／沖縄県の移民の歴史を学び、ウチナーンチュアイデンティティを再認識する（沖縄県知事公室交流推進課、同上「全国知事政策バンク」）。

[21] 恩納村出身海外移住者子弟等受入事業は、恩納村出身のカナダ、アメリカ合衆国、ボリビア、アルゼンチン共和国、ブラジル連邦共和国、ペルー共和国の 6 カ国から恩納村出身者子弟研修生を受け入れ、必要な技術研修及び伝統文化等を理解してもらうとともに、村民及び県民との交流を深める中から移住国における恩納村人会の継承発展に寄与する人材育成並びに恩納村及び沖縄県と友好親善関係の増進に資することを目的にしている。資格要件は (1) 村出身者の子弟で、各国の村人会等（その他村長が認めた者）の推薦する者、(2) 心身共に健全であり、思想穏健である者、(3) 原則として 18 歳以上 35 歳までの男女、(4) 専門研修を受けるのに必要な語学（日本語）を有する者、となっている（「恩納村出身海外移住者研修生受入事業実施要綱　平成 12 年 7 月 26 日　要綱第 10 号」恩納村『平成 25 年度恩納村海外移住者子弟等研修生受入事業　第 11 回研修報告書』p132）。

[22] 前掲、世界若者ウチナーンチュ連合会沖縄本部 HP

[23] 1984 年時点のサンパウロ市ピーラカロン地区における職業別在留沖縄県人会会員（429 人）の職業の首位は、製造業としてのクストゥーラ（縫製業）で 155 人（36.1％）である。第 2 位は商業のフェイランテ（露天市の販売業）が 76 人（17.7％）で、以下、スーパーマーケット、バール（飲食店）、衣料品店などの順に多く、48 もの職業がみられる（石川友紀「南米における沖縄県出身移民に関する地理学的研究―一世の地域的分布と職業構成を中心に―」『歴史地理学 45-1（212）』2003 年 1 月 p80）。

[24] 2013 年 9 月 21 日聴き取り調査

[25] 2013 年 9 月 21 日聴き取り調査

[26] 2013 年 9 月 6 日聴き取り調査。カッペン移民については、稿を改める。

[27] 2013 年 9 月 4 日聴き取り調査

[28] コロニア・オキナワ入植 50 周年記念誌編纂委員会編『コロニア・オキナワ入植 50 周年記念誌　ボリビアの大地に生きる沖縄移民』オキナワ日本ボリビア協会　2005 年 12 月 15 日 p420

[29] 2013 年 9 月 16 日聴き取り調査

[30] 前掲書『コロニア・オキナワ入植 50 周年記念誌』p78、p81

[31] 2013 年 11 月 14 日（29）

[32] 2013 年 11 月 16 日聴き取り調査

[33] 2013 年 9 月 14 日聴き取り調査

[34] 当時の大城保晴村長に 2013 年 10 月 31 日聴き取り調査を行ったが、まだ恩納村の予算であった確証は得ていない。大城保晴「南米視察旅行記」でボリビア恩納村人会会長の宮島繁氏の書簡を紹介している。その書簡には「皆様の物心両面及び御援助のお陰を得て我々村人一同天災地変に負けず遅々ではありますが生活の基盤を築き、二十五周年を迎える事ができましたことは一重に皆様のご指導ご声援の賜と厚く御礼申し上げます我々村人一同皆様のご恩に報ゆるべく日夜子弟の育英そして増産へ励み「ボリビア」に沖縄あり、／ボリビア沖縄に第二の恩納村を建設すべく努力して居りますので今後も旧に倍して御指導とご声援をお願いします。」と記し、別紙に恩納村人の二十五年の歩みを報告している。この書簡の「物心両面の援助のお陰で生活の基盤を築いた」ということが G と H が言う支援金の可能性もある。また旅行記には沖縄へ帰国後、ブラジルから「貴殿からの見舞金五百コントス」いただいたとのお礼の手紙が届いたことも記されている。また大城村長は南米視察時に訪問先で村人に見舞金を渡している。

[35] 屋比久孟清編著『ブラジル沖縄移民名簿』在伯沖縄県人会 1987 年

[36] 移民 1 世の軌跡を遺された家族がどのように捉え、評価しているのか、1 世とその子孫については今後の調査の課題としたい。

[37] 仲松弥秀『恩納村誌』1980 年 3 月 30 日、p542

[38] 2013 年 9 月 6 日聴き取り調査

[39] 屋取集落出身と移民の関係性については、稿を改める。

[40]『恩納村制百周年記念事業企画展「あの頃の うんな」―写真が語る激動の百年』恩納村博物館、2008 年 9 月 27 日、p24

[41] 第 22 回琉歌大賞公募展（琉歌の里おんな　琉歌大賞実行委員会委員長　當山憲一）「琉歌大賞児童生徒の部　優秀賞」受賞、2012 年 11 月 11 日。

[42] 2013 年 10 月 18 日、17:30 ～ 20:30 頃、恩納村役場 2 階会議室にて行われた。

[43] 恩納村『平成 25 年度恩納村海外移住者子弟等研修生受入事業　第 11 回研修報告書』pp.95-96
[44] 同上書、pp.3-87。
[45] 2013 年 10 月 26 日聴き取り。多辺田は、共同の自給の場としてイノーを利用している住民を「海の力を生かす節度」として、住民はニ～三日の食べる分をとり、あとはコモンズとしての海（イノー）に蓄え、いつでも日常生活の必要に応じてイノーからオカズとして引き出し、永続的に利用可能している、と評価している（前掲書『コモンズの経済学』p256）。
玉野井は、沿海村落がイノーを共同利用するための村ごとの慣習法、村人の規範となるような内法があったのではないかと、述べている。（前掲書『玉野井著作』pp.234-238）。シマンチュが地先の海を守る、権利を主張する根拠として慣習法的なもの、入会権が存在していたのであろう。その内実については今後の課題とする。
[46] 玉野井は、「地先の海」を「コモンズとしての海」として捉え、海に沿ってでき上がった村にとっての共同利用の場であるとし、利用する村びととは、農業を基礎としながら同時にそのかたわら漁業にも従事したり、あるいは水産物を生活の足しにするといったような半農半漁、それが沿海村落の特色になると述べ、沖縄の海には、本土と違う重要な特性があるとし、「沖縄の海には、浜辺からリーフに至るまでの間の独特の空間がある。これは部落の海とか、村の海とか呼ばれてきたものである。村のひとたちは、この海を利用して、そこで魚や貝などを採って、日常の暮らしの足しにしてきた。こういう独特の空間があるということが、本土の海と大きく違う特色だと思う。」「村のひとたちはリーフと海辺の間に広がる空間で、海草を採ってそれを食膳に供したり、農業用の肥料にしたりしてきた。この空間には外から海水が入って来るけれども、しかし、それ自身ひとつの閉鎖的な海面を構成している。珊瑚礁そのものは、海の生態系を構成する重要な要素であるが、珊瑚礁とともにあるところの生態域がさらに非常に重要である」（前掲書『玉野井著作集』pp.231-232）と、リーフに囲まれた独自な生活空間に注目し、沖縄の海（イノー）を資源としてではなく、コモンズとしてとらえ、沖縄における地域主義の根拠としている。
　一方、多辺田も、イノーを単なる資源としての海ではなく「コモンズ」としての海とし、コモンズを地域住民の「共」的管理（自治）による地域空間とその利用関係（社会関係）とよび、地域内の水（河川・湖沼・湧水）や森林原野、海浜、海を含む土地空間、相互扶助システムとしての労働、サービス、信用などを含む地域の「共同の力」と位置づけている（前掲書『コモンズの経済学』、ｐｉ）。そして、多辺田は「海のコモンズ」を「共同体のもつ非市場的な地域資源とそれに結びつく人間の関わり方、つまり地域資源の共同利用のもつ可能性と、そこでもたらされる豊かさ」だとしている（前掲書『玉野井著作集』p314）。また、石垣市白保の事例から、白保の農民の豊かさはサトウキビや水田だけによってもたらされているのではなく、入会（コモンズ）としての海に大きく依存して生かされてきとし、生命の海（イノー）の一体感のおかげであるとも述べ（同上、pp242-262、ｐⅲ）、「コモンズの経済学」の根拠の一つとしている。筆者は、本稿で沖縄移民の特質である「共同体の存続」をコモンズの海（イノー）を根拠とした。
[47] 現在のオニヒトデ駆除については、恩納村 HP「恩納村オニヒトデ対策ネットワーク」参照
[48] 特殊部隊訓練場建設及び実弾演習場反対・恩納村実行委員会『山死して国栄え　山死なば村滅ぶ』1990 年 8 月 1 日、no29「元恩納村長、県出納長、副知事比嘉茂政氏」沖縄県町村長会『聞き書き沖縄自治物語Ⅱ』pp.189-192
[49] 国家の移民政策は、戦後については米軍基地と関連するが、戦前については満州等の殖民政策と関連する。拙稿（前掲書「沖縄南洋移民の一考察」）で「沖縄南洋移民とは、客観的に

は殖民であり、主観的には移民であった」結論づけているが、客観的には (1) の国家の移民政策であり、主観的には (2) の海外雄飛、(3) 家族の維持（保護）であったが、本稿の研究によって (4) の共同体の存続―シマンチュの絆も含意していたということである。

[50] 移民の父といわれる當山久三は、海外雄飛の象徴として取り上げられることが少なくないが、第 1 回ハワイ移民が 30 人中 10 人が、金武村人で、當山の出身地である並里であった。さらに第 2 回ハワイ移民は 45 人の団員のうち 1 人を除いて全員が並里出身であった。そして當山自身の弟をはじめ、いとこや隣近所の青年が多数含まれていた（金武町史編さん委員会『金武町史　第一巻移民・本編』金武町教育委員会、1996 年 3 月 31 日、p41、p50）。このことは、表向きは海外雄飛であるが、ハワイにおける共同体の存続であり、シマンチュの絆でもある。

[51] 移民は、単身で出稼ぎとして海外へでて、家族へ送金したり、移民先で生活基盤ができると家族を呼び寄せたり、または家族と一緒に移民したりすることによって家族を維持（保護）していくが、その本質は移民地での共同体の存続であり、沖縄の共同体の存続にもつながるということである。